



写真-1 畑瀬大橋を加古川左岸から撮影（平成29年5月）

#### ■ 昭和10年に架けられた「畑瀬大橋」、米寿を超える

写真-1は、西脇市黒田庄町津万井の加古川に架かる「畑瀬大橋」で、一般県道559号門柳大門（もんりゅうだいもん）線の一部をなし、右岸部は国道175号に接続しています。ここは、明治45（1912）年3月に木橋の畑瀬大橋が架けられるまで、人々は「畑瀬の渡し」によって行き来していました。

現在の畑瀬大橋は、昭和10（1935）年に架けられた14径間（1径間13.2m）のRC桁橋で、橋長182m、幅員5.5mです。架橋から約90年が経過し橋梁の高齢化※1が進んでいます。



写真-2 畑瀬大橋と下流に見える津万井堰（令和元年11月撮影）



写真-3 畑瀬大橋（左）と畑瀬歩道橋（右）（令和元年11月撮影）

※1 橋梁の高齢化：「老朽橋」の定義は明確にされていないが、一般的に建設後 50 年以上経過した橋とされている。しかしながら、これらの橋は、危険で通行規制をとらざるを得なくなった橋がある一方で、まだまだ健全に機能を発揮している橋もある。ここでは誤解を避けるために、完成後 50 年以上経過した橋は、「老朽橋」ではなく「高齢橋」と呼ぶこととする。兵庫県が管理する道路橋（平成 22 年時点で約 4,700 橋）のうち、高齢橋は約 950 橋で 20% を占めている。

## ■ かつて津万井堰の静水面を利用して「畑瀬の渡し」があった

『多可郡誌』によると、旧黒田庄町内の加古川には、上流から「船町の渡し」、「西澤の渡し」、「大伏の渡し」、「畑瀬の渡し」の 4 箇所の渡しがあったそうです。

そのうちの一つ「畑瀬の渡し」は、江戸時代からあったとされる人渡しで、津万井堰のすぐ上流にあって、井堰によって生じる静水面を利用して舟渡しが行われていたと思われます。舟着場は、右岸が畑瀬大橋の右岸橋台直下にあるとあって、左岸は水裏に当たり河原であったため、舟着場を設ける必要がなかったと思われます。

渡しに使われた高瀬舟は、畑瀬大橋東詰の「渡し舟展示館」に展示されています。元は津万井の大歳神社に保管されていたもので、長さ 24 尺（≒7.2m）、幅 5 尺（≒1.5m）、深さ 2 尺 5 寸（≒0.75m）です。



写真-4 「津万井の日」に復活した畑瀬の渡し

渡し舟は、船頭が竹竿を操り、出水時を除き 1 年中運航していました。運航は、夜明けから日没までで、客が集まり次第出していたとか。自転車を乗せることもありましたが、通常は人のみで暮らしの足として利用されていました。

なお、この渡しの右岸側には、福知山市から加古川、高砂に至る道（現・国道 175 号）が通っていました（写真-10）。

### 畑瀬の渡し船

#### 大門（畑瀬）伊藤秋代

雨季を迎え、台風シーズンが終る途には、毎年畑瀬の川は氾濫した。川幅は今の半分程であったと思う。雷様は私の家の裏山に住んでいると思ひ込んでいた。西の空がゴロゴロと鳴り出すと私はうれしかった。雨は降りふれモット降り、橋が落ちる迄ふれ…。

念願がかない赤い濁流に乗って大木、つばき等あらゆる物体がひしめき合つて流れて来た。ドンドンと音をたてて橋げたに当り、めりめりと橋は落ちて流れて行った。丁度活動写真を見ている様である。

当時は自転車が行くだけだけの幅の木橋であった。昭和十年現在の橋が掛る迄には、記憶に残っているかぎり三、四回は流れ落ちたと思う。

大水が出た…橋が落ちた…学校は休みになった…うれしかった。水量が引いて来ると通称竹やんとよぶ隣のおじちゃんに、船に乗せて私達を同岸迄運んで呉らった。竿の巧なやさしい小柄なおじちゃんだった。

私はそのおじちゃんが大好で船へよく遊びに行った。船で川を渡り、橋の補修が出来る迄楽しい通学が始まった。大伏の最後の子がすむ迄、おじちゃんと船の中で何回も行ったり来たりして遅刻したりした。私の少女期の一番うれしいなつかしい思い出である。

橋は掛け変わる毎に畑瀬橋と、ひらかなで書かれたり、漢字で書かれたりした。

欄干を手でパチパチたたきながら、着物を着てわら草履をはいて小学校へ通った。当時はまだ電気がついてなかった私の家では、ランプのホヤの掃除は私の仕事であった。或る日油を買いに行った帰り道欄干の間から河原へ落ちて両親をふるえさせた事がある。黒田庄の内では何と云っても畑瀬が一番よい所だ。

風光明媚、濁流とは反対に夏は虫で川の面は明るかった。…かじかが鳴いている…静かな夜である。

橋の上でパイオリンを引く人、喜多村の才三さんと云う人が毎晩八をふいておられた。その音色（ねいろ）と共に懐しい人だ。櫓のきいた浴衣を着て、うちわを持って、もう一度「木橋」の上で涼んでみたい。

昭和六十一年発行「黒田庄よもやま昔話」掲載による

昭和九年、美濃川の橋大橋、下の木橋は明治四十五年の架設。

明治四十五年の畑瀬木橋。

写真-5 畑瀬大橋の左岸にある「渡し舟展示館」の近くに立つ「畑瀬の渡し船」説明板



写真-6 「はたせのわたし」と刻まれた石柱（畑瀬大橋東詰）



写真-7 渡し舟展示館（畑瀬大橋東詰）

### ■ 明治 45 年に畑瀬木橋が完成し、渡しは廃止となる

交通の発達に伴い、渡しによる連絡は不便この上ないということから、明治 45（1912）年 3 月に旧津万井村※2 初の橋（畑瀬木橋）が架けられ、江戸時代から地域住民の足だった畑瀬の渡しは廃止となりました。この橋は、自転車が行き違いできる程度の幅の木橋だったそうです。明治 35（1902）年、約 6km 上流にあった船町の渡しに船町橋（木橋）が架けられていますが、この橋の長さが 40 間（≒73m）、幅が 5 尺（≒1.5m）だったので、畑瀬木橋の幅も 1.5m 程度だったと思われます。



写真-8 完成した畑瀬大橋と完成を祝う渡し舟



写真-9 中央部流失後の畑瀬木橋と完成した仮橋、復活した渡し舟

大正 10（1921）年 9 月の大洪水により畑瀬木橋の中央部が流失、応急処置として下流側に仮橋が架けられるまでの間、渡しが復活します。仮橋の完成は、大正 11（1922）年 11 月です。

写真-9 には、洪水により中央部が流失した畑瀬木橋と、下流側に架けられた仮橋、橋流失に伴い復活した渡し舟が写っています。

※2 津万井村：明治 22（1889）年 4 月 1 日、町村制の施行により、喜多村・大門村・津万井村・岡村・福地村・大伏村・門柳村・前坂村・黒田村・小苗村・船町村・田高村・石原村の区域をもって黒田庄村が発足。昭和 35（1960）年 1 月 1 日 町制施行により黒田庄町となる。平成 17（2005）年 10 月 1 日に黒田庄町は西脇市と合併し、改めて西脇市が発足。同日黒田庄町廃止。

### ■ 昭和 10 年、RC 桁の畑瀬大橋が竣工

昭和 7（1932）年 7 月 1 日の台風による大洪水により畑瀬木橋の桁が折れ、木橋は一瞬にして押し流されて行ったそうです（この洪水では、畑瀬木橋のほか上流の中央橋も流失し、船町橋だけが無事でした）。

仮橋が架けられるまでの間、再び渡しが復活します。そして、昭和 10（1935）年に多可郡内随一といわれた RC 桁の立派な橋（畑瀬大橋）が架けられ、2 月 18 日に竣工式・渡橋式が挙行されています。

橋梁工事が先行して完成したため、戦後に国道の土盛り工事が完成するまでの間、取り付け道路から橋の上まではかなりの急坂でした。そのため、馬車や荷車を押し上げるのが大変で、「押し屋」という荷車押しの商売があったとか。

昭和 50（1975）年 10 月、橋の上流側に歩道橋（畑瀬歩道橋）が付加されていますが、車道幅員は 5.5m のままで大型車同士の離合が困難な状況にあります。



写真-10 昭和 30～33 年頃の国道 175 号と畑瀬大橋  
(『津万井概史』から引用・加工)



写真-11 畑瀬大橋西詰の歩道橋から撮影  
(令和元年 11 月)



図-1 畑瀬大橋周辺の地図

## ■ 船町の渡し、西澤の渡し、大伏の渡しの今

かつて旧黒田庄町内にあった 4 箇所の渡しのうち、畑瀬の渡しは既述のとおりですが、他の 3 箇所の渡しの今はどうなっているのでしょうか。

① 船町の渡し：現在の船町蛭子（えびす）神社付近にあった渡りで、加古川の東岸と西岸に開けていた当時の船町村を人渡し（一岸出船）で結ぶ役割を果たしていました。この渡しは明治 35（1902）年の船町橋架橋によって一旦廃止されましたが、明治 40（1907）年の落橋後に復活し、大正 3（1914）年 5 月の架橋により再び廃止になります。しかし、その後も船町橋はたびたび洪水で落橋し、その度に渡しが復活していたようです。

当時、乗り場には栈橋があり、杭を打った上に 1～2 間の小さな板橋が渡してありました。舟は橋が復旧するまでの間、朝から晩まで運航され、客が集まり次第舟を出していました。現在は“段（だん）”と呼ばれる渡しの乗り場跡が、橋の左岸側すぐ北に残っています。（現地を見ると、高水敷に鉄平石を敷いた所があり、それが乗り場跡かも？）

現在の橋の型式は、4 径間単純鋼合成鈹桁橋、橋長 150m、幅員は車道 6.6m、歩道 1.5m で、昭和 50（1975）年に架けられたものです。

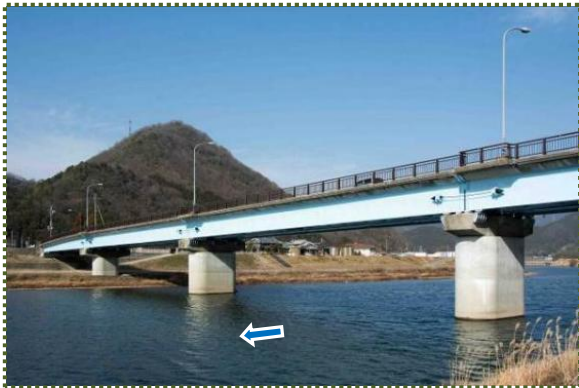


写真-12 耐震補強工事後の船町橋（令和3年1月撮影）

② 西澤の渡し：明治 40（1907）年頃に小学生の通学用に設けられた渡しで、現在の中央橋の下、西澤の竹藪付近に渡し舟があったそうです。

昭和 49（1974）年 3 月、現在の中央橋（路線名は一般県道第 174 号本黒田停車場線）が供用開始しています。

橋の型式は、5 径間単純鋼合成鈹桁橋、橋長は 166.6m、幅員は車道 6.5m、歩道 1.0m です。



写真-13 耐震補強工事中の中央橋（令和3年1月撮影）



図-2 燐瀬大橋・中央橋・船町橋の位置図

③ 大伏の渡し：明治維新前より設けられていた渡しで、JR 本黒田駅と JR 黒田庄駅の間付近にあったそうです。

## ■ モノローグ

平成 16（2004）年、県が進めていた加古川改修工事の中で姿を消してしまった渡し場跡の記憶をとどめるため、渡し舟の展示施設「渡し舟展示館」を燐瀬橋左岸付近に整備、これがきっかけとなって地元で渡し舟復活の機運が盛り上がります。そして、昭和 63（1988）年に「温故知新」の精神で始まった「津万井の日」（地蔵盆に近い土曜日に開催）の地域活性化イベントのひとつとして、平成 16（2004）年に「燐瀬の渡し」が復活しました。

このイベントを継続していく中で、先人の苦勞を偲び、先人の知恵に学ぶ機会にしようとの想いが盛り上がりましたが、その年の 10 月に発生した台風 23 号による洪水でイベント会場だった高水敷が荒れてしまい、以後イベント会場は大歳神社周辺に変更し、渡し舟イベントは残念ながら開催できていないそうです。

なお、燐瀬大橋周辺では、国道 175 号西脇北バイパス（L=5.2km）の工事が進められていて、令和 2（2020）年 3 月 14 日、寺内ランプ～大伏ランプ間の約 2.1km が 2 車線で部分開通しています。

### オギ（荻）

畑瀬大橋付近の加古川高水敷に生えていた。イネ科ススキ属。ススキによく似ているので間違えやすいが、ススキは乾いた場所に生え、オギは水辺などの湿った場所にしか生えない。特徴は、穂が銀白色で長く、羽毛状の小穂の先端には刺のような芒（のぎ）がないこと。大正 10（1921）年に発表された「船頭小唄」（野口雨情作詞・中山晋平作曲）の冒頭に「俺は河原の枯れすすき ♪ ♪」というのがあるが、多分「オギ」の間違い。森繁久彌さんが映画「雨情物語」の主題歌として歌ったとか。



写真-14 オギ（畑瀬大橋下の高水敷にて撮影）

#### 【参考資料】

- 1 『多可郡誌』 多可郡教育会編纂 大正 12 年 12 月
- 2 『くろだしょう庶民百年史』 黒田庄『ふれあいグループ』 平成 5 年 9 月
- 3 『津万井概史～加古川の流に抱かれて』 津万井集落 平成 30 年 8 月
- 4 『オギ～秋の野草』 永田芳男 平成 3 年 9 月

※発行：令和 3（2021）年 4 月 『ひょうご水百景』 No.125

改訂：令和 8（2026）年 7 月 『ひょうご水百景』 No.125